

【 復活讃詞 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
 天在者樂地在者
 よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
 悦主其臂力顯
 わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
 死以死滅
 くかつのはじめとなり、われらをぢごく
 活首我等地獄
 のはらよりすくい、せかいにおおいな
 腹救世界大
 るあわれみをたまいたればなり。
 憐賜

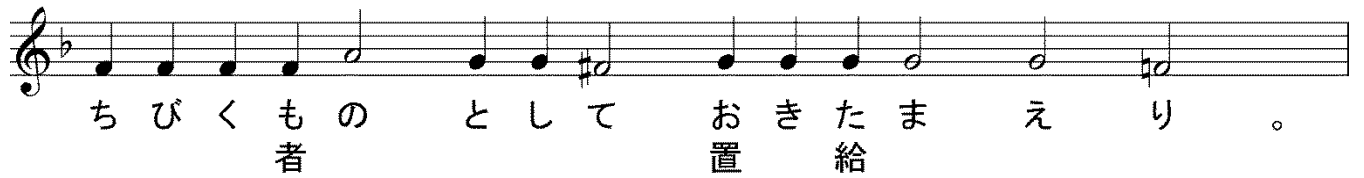
【 階梯者イオアンのトロパリ 第1調 】

こおえいはちちとことせいしんにきす、
 光榮父子と聖神歸
 ほうしんなるわがしんぷイオアンよ、な爾
 捧神我神父
 んぢはののじゅうしゃにしてにくたいにおけるて天
 の野住者に肉體に於て
 んしおよびきせきしゃとあらわれたり。な爾
 使及奇跡者顯
 んぢはものいみと、けいせいと、きとうと
 齋警醒祈禱

をもって てんのおんしをえ て、しんをもって
 以 天 恩 賜 獲 信 以
 な んぢに は し り つ く も の の れ い た い の や
 爾 趨 附 者 の 靈 體 の 病
 ま い を い や し た も お う。 こ う え い は な
 醫 給 光 榮 爾
 んぢに ち か ら を あ た え し し ゅ に き し、 こ う え
 力 與 主 歸 光 榮
 い は なんぢに え い かん を こ う む ら せ し し ゅ に き
 爾 榮 冠 冠 主 歸
 し、 こ う え い は なんぢを も っ て し ゅ う に
 光 榮 爾 以 衆
 い や し を た も う し ゅ に き す。
 醫 治 賜 主 歸

【 階梯者イオアンののコンダック 第4調 】

い ま も い つ も よ よ に、ア ミ ン。
 今 何 時 世 世
 き ょ う ど う し イオア ン、わ れ ら の し ん ぷ よ、し ゅ
 嚮 導 師 我 等 神 父 主
 は なんぢを ま こ と の せ っ せ い の た か き に、う 動
 爾 眞 節 制 の 高
 ご か ざ る ほ し、そ の ひ か り を も っ て し き よ く を み 導
 星 其 光 以 四 極



司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
に、



【 聖三祝文 】



なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 聖 常 生 者 我 等 憐
 あわれめよ。

司祭) (黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第3調 及び克肖者の第7調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{わ かみ うた うた} プロキメン、我が神に歌い歌えよ、^{わ おう うた うた} 我が王に歌い歌えよ、



誦經) ^{ばんみん て う よろこび こえ もつ かみ よ} 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、



誦經) ^{しよせいじん こうえい あ いわ そのとこ あ よろこ} 諸聖人は光榮に在りて祝い、其榻に在りて歡ぶべし、



【 使徒經 (アポストロス) 314 端 エウレイ書6章13節~20節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しよ よみ} 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい かみ きよやく たま とし おのれ おおい もの いつ さ ちか} 兄弟よ、神はアヴラアムに許約を賜う時、己より大なる者の一も指して誓うべき

なきが故に、己を指して誓いて云えり、我必祝福して爾を祝福し、益して爾

を益さんと。斯くアブラアムは恒忍して、許約せられし所を獲たり。蓋人は己より大

なる者を指して誓う、且事を確證する誓は彼等の凡の争論を息む、故に神も許

約を嗣ぐ者に、己の旨の易らざるを更に明に示さんと欲して、別に誓を立てたり、

斯の二の易らざる者に於て神は語る能わざるが故に、我等斯の二の者を以て確

なる慰を得ん爲なり、蓋我等は趨りて我が前に在る望を執る者なり。此の望は我

等の靈の爲に堅くして、動かざる錨の如し、且幔の内に入る、即イイススがメル

キゼデクの班に循いて、世世の司祭長と爲りて、我等の爲に前驅として入りし所なり。

(比較用 口語訳) 神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言われた。このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いつそうはつきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事がらによって、前におかれている望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。

【 使徒経 (アポストロス) 229 端 エフェス書 5 章 9 節～19 節 】

司祭) 睿智、

誦経) 聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦経) 兄弟よ、光の子の如く行え。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾

等神の悦ぶ所の何なるを審にせよ、實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、

甯之を責めよ。蓋彼等が隠に行う事は、言うも亦耻づ可し。凡そ責めらるる事は

光に由りて顯る、蓋凡そ顯るる事は光なり。故に云えるあり、寐ぬる者起きよ、死

より復ふく活かつせよ、ハリストスなんぢ 爾てら を照こさん。是こを以もつて視みよ、行おこない を慎つつしみて無むち智ものの者ごとの如くく
 せず、乃すなわち 智ちある者ものの如ごとくせよ、時ときを惜おしむべし、日ひは悪あしければなり。是この故ゆえに思しりよ慮ものなき者
 と爲なる勿なかれ、乃すなわち 神かみの旨むねの何なになるを覺さとれ。又また 酒さけに酔よう勿なかれ、此これに由よりて放ほう蕩とうあり、
 乃すなわち 神しんに満みてられよ。聖せい詠えいと歌か頌しょうと屬ぞく神しんの詩し賦ふとを以もつて、口くちに唱となえ、心こころに和わして、
 主しゅを讚さん美びせよ。

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい—— 光はあらゆる善意と正義と真実との実を結びせるものである—— 主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

司祭) 爾なんぢ に平へい安あん、

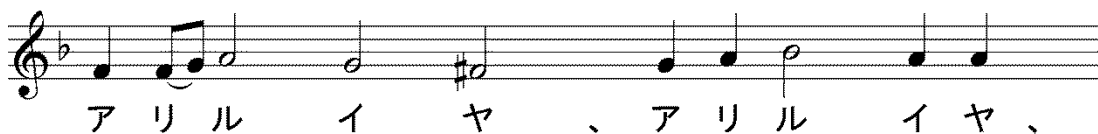
誦經) 爾なんぢ の神しんにも、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 主日第3調・克肖者の、第7調 】

司祭) 睿えい智ち、



誦經) 主しゅよ、我われ 爾なんぢ を恃たのむ、願ねがわくは我われ 世よ世よに羞はぢを得えざらん、





誦經) 彼等は主の宮に植えられて、我が神の庭に榮ゆ、



司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

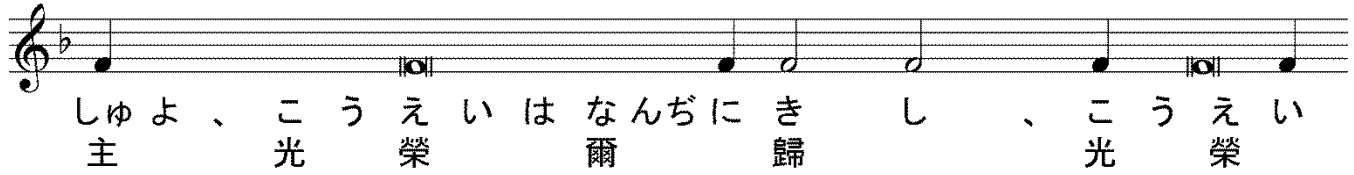
て生命を施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書40 端 9 章17~31 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時或人イイススに就きて、伏拜して曰えり、師よ、我瘡の鬼に憑

られたる我が子を 爾 に 攜 え 來 れ り。鬼は何處に彼を執うとも、投げ 仆 し、彼 沫 を 噴 き、
 齒 を 切 み、體 枯 る、我 爾 の 門 徒 に 之 を 逐 い 出 だ さん こと を 請 い た れ ど も、彼 等 能 わ ざ り
 き。イイス 彼 に 答 え て 曰 く、噫 信 な き 世 や、我 何 時 ま で か 爾 等 と 偕 に 在 ら ん、何 時 ま で
 か 爾 等 を 忍 ば ん、彼 を 我 が 許 に 攜 え 來 れ。乃 彼 を 攜 え 來 れ り、彼 イイス を 見 れ
 ば、鬼 忽 彼 を 拘 攣 さ せ、彼 地 に 仆 れ 輾 び て 沫 を 噴 け り。イイス 其 父 に 問 え り、彼 に
 か な い づ れ と き い お さ な と き き か れ ほ ろ ぼ た め し ば し ば ひ
 斯 く 爲 り し は 何 の 時 よ り か。曰 え り、幼 き 時 よ り な り。鬼 は 彼 を 滅 さん 爲 に、屢 火
 に 又 水 に 投 じ た り。爾 若 し 何 を か 能 せ ば、我 等 を 憫 み て、我 等 を 助 け よ。イイス 之
 に 謂 え り、爾 若 し 幾 何 か 信 ず る こと を 能 せ ば、信 ず る 者 に は 能 せ ざ る こと な し。童 子 の 父
 だ ち 涙 を 垂 れ て、呼 び て 曰 え り、主 よ、我 信 ず、我 が 不 信 を 助 け よ。イイス 民 の 趨 せ
 集 る を 見 て、汚 鬼 を 禁 め て、之 に 謂 え り、瘡 に して 聾 なる 鬼 よ、我 爾 に 命 ず、彼 よ
 り 出 で て、再 彼 に 入 る 勿 れ。鬼 號 び て、甚 し く 彼 を 拘 攣 さ せ て 出 で た り、彼 は 死 せ
 し 者 の 若 く な り て、多 くの 者 彼 死 せ り と 云 う に 至 れ り。イイス 其 手 を 執 り て、彼 を 起 し
 た れ ば、彼 即 立 て り。イイス 家 に 入 り し 時、其 門 徒 私 に 彼 に 問 え り、我 等 が 之 を 逐
 い 出 だ す 能 わ ざ り し は 何 の 故 ぞ。彼 曰 え り、祈 禱 と 齋 と に 由 ら ざ れ ば、此 の 類 は 出 づ
 る 得 ざ る な り。彼 等 彼 處 を 出 で て、ガ リ レ ヤ を 過 ぐ、彼 は 人 の 之 を 知 ら ん こと を 欲 せ ざ り き。
 蓋 其 門 徒 に 教 え て、人 の 子 に は 人 人 の 手 に 付 さ れ、人 人 彼 を 殺 し、殺 さ れ て 後 彼 第
 三 日 に 復 活 せ ん と 曰 え り。

(比較用 口語訳) 群衆のひとりが答えた、「先生、おしの靈につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。靈がこのむすこにとりつきますと、どこでも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、齒をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この靈を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。そこで人々は、その子を見もとに連れてきた。靈がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。靈はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「も

しできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「おしとつんぼの霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいつて来るな」。すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人、死んだのだと言った。しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈りによらなければ、どうしても追い出すことはできない」。それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 10 章 4 章 25~5 章 12 節 】

司祭) 睿^{えいち}智^ち、マトフェイ^{でん}傳^{せいふくいんけい}の聖^{よみ}福^{つつし}音^き經^かの讀^{とき}、謹^かみ^{とき}て聽^かく^{とき}べし、彼の^か時^{とき}、ガリレヤ^か、デカポリ^{とき}、
イエルサリム^{そと}、イウデヤ^{おお}、イオ^{たみ}ルダン^かの外^{したが}より衆^{ぐん}くの民^{しゅう}彼^みに從^みえり。イイスス^み群^み衆^みを見て、
山^{やま}に登^{のぼ}れり、既^{すで}に坐^ざせしに、其^{その}門^{もん}徒^と彼^{かれ}に就^つけり。彼^{かれ}口^{くち}を啓^{ひら}きて、之^{これ}を教^{おし}えて曰^いえり、神^{しん}
の貧^{まづ}しき者^{もの}は福^{さいわい}なり、天^{てん}國^{こく}は彼^{かれ}等^らの有^{もの}なればなり。泣^なく者^{もの}は福^{さいわい}なり、彼^{かれ}等^ら慰^{なぐさ}め
得^えんとすればなり。温^{おん}柔^{じゅう}なる者^{もの}は福^{さいわい}なり、彼^{かれ}等^ら地^ちを嗣^つがんとすればなり。義^ぎに飢^うえ渴^{かわ}く者^{もの}
は福^{さいわい}なり、彼^{かれ}等^ら飽^あくを得^えんとすればなり。矜^{あわれ}恤^みある者^{もの}は福^{さいわい}なり、彼^{かれ}等^ら矜^{あわれ}恤^みを得^えんと
すればなり。心^{こころ}の清^{きよ}き者^{もの}は福^{さいわい}なり、彼^{かれ}等^ら神^{かみ}を見^みんとすればなり。和^わ平^{へい}を行^{おこな}う者^{もの}は
福^{さいわい}なり、彼^{かれ}等^ら神^{かみ}の子^こと名^なづけられんとすればなり。義^ぎの爲^{ため}に窘^{きん}逐^{ちく}せらるる者^{もの}は福^{さいわい}な
り、天^{てん}國^{こく}は彼^{かれ}等^らの有^{もの}なればなり。人^{ひと}我^{われ}の爲^{ため}に爾^{なん}等^{ぢら}を詬^{のし}り、窘^{きん}逐^{ちく}し、爾^{なん}等^{ぢら}の事^{こと}を譎^{いつ}わ
りて諸^{もろ}の惡^あしき言^{ことば}を言^いわん時^{とき}は、爾^{なん}等^{ぢら}福^{さいわい}なり、喜^{よろこ}び樂^{たの}めよ、天^{てん}には爾^{なん}等^{ぢら}の
賞^{むくい}多^{おほ}ければなり。

(比較用 口語訳)

こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびたしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。

平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

The image shows two staves of musical notation in G major (one flat). The first staff contains the melody for the first line of lyrics, and the second staff contains the melody for the second line. The lyrics are written in Japanese and Latin characters below the notes.

※聖體礼儀③ へ